

『学校生活と郵便友の会』一九五七年五月（日本郵便友の会協会）

☆一種の社会的流行現象とも言える文通は生徒の成長にとつてどんな意味があるのか、またどんな役割を果させるべきか、これは私たちがいつも考えていることです。国立教育研究所の矢口先生のご意見を伺ってみました。

人間のまじわりを

矢口 新

これは、私のうちの話である。私が年賀状を書いていたら、五つになる男の子が、ぼくも手紙が出したいなあ！という。

「出さないよ。誰でもいいよ」

「だって誰に出したらいいかわからないんだもの」

「誰でもいいよ、知っている人で」

「あっそうだ、ハッチャンに出そうつと」

こうして、彼は四つになる従妹のハッチャンに年賀状を出したのである。

小学校の場合

これは子供の話である。郵便友の会がこういう子供の世話をしてくれて、手紙を出したいと思う子供の希望をかなえさせてくれるのはよいことであろう。小学校時代はそれで

郵便友の会も子供にとつて結構役割を果してくれるものになりそうである。私は郵便友の会のことは余りよく知らないが、会員となつて名簿をもらつて、どこかの誰かに手紙を出せるということは、小学生にとっては有難いことだと思ふ。

もう少し手を加えて、先生が世話をして学級の子供の学習に合わせて、山の子供が海の子供に手紙を出して、未知の世界のことも知らせ合うというようなことになれば、これは大成功である。ただ知らない人に、行き当たりばったり手紙を出すのではなく、ちゃんとした目的がある。自分は山の生活をしていて、海のこと知らない。海のことをもっと知りたいと思ふ、それは現代社会に生活するものの義務でもあり責任でもある。既に海と山の

それぞれの生活者は実際には相互に扶助し合っているのだ。だからいろいろと知らせてほしい。自分もいろいろと生活の様子や、意見や感想などを知らせよう。そうしてお互いにもっと、社会的関係を密にしようではないか。こういった考え方が発展して来ることは、とてもよいことである。また子供らしい純真さもあつて良いことだと思ふ。学校の先生の指導がそこへ向いて行くのも当然のことであらう。

中・高校の場合

しかし中学校や高等学校の生徒になると、集団文通などということもなかなかむずかしくなつて来るのではないか。ちよつと程度が高くなつてくるといふ言い方でもよいかもしれないが、みんな山の子供に手紙を出そうなどといったことは、もう子供らしいと感じられる年頃である。手紙を書くなどといったことは、そういう心理的なものが大いに働くのだから、こういう俺たちはもう大人だなどといった中学生、高等学校生の心理は無視してはならない。また個性がはっきり自覚されて来る時でもあるので、そういうことを考慮に入れて世話をしてやりたいものである。

もし中学生や高等学校の生徒に、郵便友の会におはいりなさい、そうすると会員名簿をもちょうことが出来て、お互いに誰とでも文通できますよなどというすすめ方をしたら、あまり相手にされないのではないか。若し、そういうので入って来るとしたら、むしろ異常な心理の子供ではないだろうか。或は夢みたいなことを考えている子供ではないだろうか。大人がそれに援助をしてやるなどということは、あまりほめた話ではない。桃色文通などに発展するおそれがある。

用事があつたり、生活に必要な目的があれば誰とでも自由に文通ができるということはいよいことである。フランクに話し合いが出来る、手紙の交換が出来るといふ雰囲気は尊いものである。日本人は、そういう点にこだわりすぎるものがあるようである。長い封建時代の惰性のようなものが残っているのかも知れない。そういうこだわりをなくして、現代社会が必要とする相互の交通をつくりあげることとは極めて大切である。しかし、だからといって「拝啓、あなたと手紙の交換がしたいのだが、宜しく頼みます」というのは困るであろう。常識のある中学生や高校生なら馬鹿らしくて相手にしないと思う。

郵便友の会の仕事

手紙にはやはり場が必要である。よく考えてみると、われわれはこういうことが知りたいたが誰に聞いたらよいのかと思うことはよくあるのである。こういうことを教えてくれる人は、これこれの所にいる、こういう人達だろうということがわかつているととても有難い。

若し郵便友の会が、そういう仲だちをしてくれたらよいと思う。例えば、農村の中学校を出て都会に就職したいと思つて多くの中学生がいる。彼等は、就職後の様子をいろいろ知りたいと思つている。そういう生徒たちは、これこれの職場の人がやはり郵便友の会をつくつていて、そういう問に答えようとして待っているということがわかつたら嬉しくなるにちがいない。そこに本当の人間の交わりも生れるであろう。

こういうたぐいのサービスというのは、郵便友の会を育てようとする大人の人々がやってくると有難いと思う。それはただ手紙を出すということだけでなく、真に人間と人間とのつきあいを推進する仕事である。やはり郵便は人間の愛情の交換だということを忘れてはならないのではないか。